
君に届くまで

Sorairo 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君に届くまで

【Nコード】
N6627J

【作者名】
Sorairo 光

【あらすじ】
不慮の事故で引き裂かれた二人の物語。

赤い糸リツへハルより

「晴聞こえてる？今どこにいるの、俺はココだ。」
何を言いだすの？私はココだよ、隣にいるよ。

淡い雪のように振っては消えていくこの切ない感情。
届けたい、届かない、届けられない。

私の声はあなたに届く事なく私に帰ってくる。
指電話の先にいるのは私。

届かない、届けたい・・・でも無理だった。

背中合わせになって私はあなたから離れていく。
忘れてほしい、忘れてほしくない。

指に巻かれた赤い糸、いつ解けるかもわからない。
怖い・・・。

すると君が振り返って私を追い掛けてきた。
まるで見えるかのように。

私は姿を消した。

彼は見知らぬ女の肩をつかみ、振り返らせた。
「え？」

その人はキョトンとして彼は困り顔になった。

「ああ、人違いでした、ごめんなさい。」

私はココよ、あなたたちの斜め上にいるよ。

その人と仲良くなつていく彼。

それはわざと私がそうなるように仕組んだのに、何故？

赤い糸を切ることができなければあなたからの指電話も嬉しいなんて・・・。

どうして毎日かけてくれるの？私が出ても声は届かないと分かり切っているのに。

忘れてほしい、忘れてほしくない。

君からの指電話、嬉しいなんて。

君を困らせて不幸にするだけなのに切れないよ．．．．とまらないよ。

逢いたいよ．．．．会ってるのに．．．．逢いたいよ．．．．私を抱き締めてよ。

雨の中で私たちがよくいった公園のベンチに座り、眠っていたあなたに、あなたにとって使い物にならない傘を差し出して私と相合傘にしてみても、やっぱり意味はなかったね。

私はあなたから離れ、一人傘のなかに入る。

横にいるよ、あなたと知り合ってあなたに惹かれたあの女の人。

私をあなたが追い掛けたあの日からあなたは彼女と付き合いはじめる運命だったのかもしれないね。

彼女は私より大人っぽい性格で私よりスタイルが良くてあなたをきつと思ってくれてるよ。

ふつと立ち上がって消えようとした瞬間、あなたは目を覚ました。

一瞬私の方向を見たけど、私とは顔も性格も違う彼女を見て目を大きく見開いた。

ねえ、ごめんね。

もつと素直になれば良かった。

あなたの誕生日にあげた指輪。

本当はね．．．．メチャクチャ悩んだの。

“ 婚約指輪が欲しい ” なんて言えるはずもなかった。

だから指輪関連で気付いてくれるといいなって思ってたの。

あなたにどんな指輪があうかわからなくて何店舗も歩き回った。

でもしつくりくるのがなくてついに挫折してかつこいいのを一つだけ買った。

いざとなつて、私は指輪の入った袋をあなたに投げ付けた。

だって悔しかった。

満面の笑みで「何を選んでくれたの？」なんて．．．．。

「別にたまたま入った店でかつこいいのがあったから買ってきただけ！」

「ふーん？」

すごく余裕で、なんでもお見通しみたいな顔して悔しくて、袋をあなたに投げ付けたら、あなたは慌てて座ってた椅子ごとひっくり返した。

今ココにある過去にあなたも以前の私もいない。

あの時はあつかんべーをして笑ってやったけど。

今ココにあるのは、引つ繰り返った椅子と私があげたプレゼントだけ。

私の記憶に残る、一番強い映像。

プレゼントを拾いながら一人涙が伝う。

本当はね嬉しかったよ。

お見通しになるくらい私のこと知ってくれてること……………。
今日も来た。

あなたからのメッセージ。

「晴、どこにいる？俺はココだ。晴を愛してる。」

人一倍優しいあなた。

「私も愛してるよ……………律……………」

届かないと知っても、好きだよ。

「素直に言えなくてごめんね。」

“生前”には言えなかった。

「愛してる……………愛してるよ……………ごめんね……………」
「……………」

事故にあつて半分死にかけた律の魂を私は元の世界へと戻した。

いきててほしいよ。

でも律を苦しめるなら……………。

忘れてほしくない。

だけど、これが最善だよ……………？

私ははさみを持ち出し、小指に繋がれている赤い糸を切っていく……………。

手が震える。

少しずつ糸が解けていく。

カシャン・・・・・・・・。

はさみが手から落ちて、私は座り込んでしまった。

無理だよ、切れないよ！

切れるわけないよ！

「ごめんね。ごめんね・・・・・・・・愛してる・・・・・・・・。」

だから届かない言葉を君に送ろう。

愛してる・・・・・・・・。

季節巡っても忘れないハルヘリツより

頭の中で聞こえる君の声が今でも俺の心を揺さ振っている。

記憶の中で君は今でも意地悪そうに微笑んでいるよ。

あの日俺にプレゼントをくれて、帰ると言い張る君を見送りに行った。

離したくなかったから手をつなぎ歩いた君の横顔、照れながら「しかたないわね。」と言ったこと覚えている。

ツンデレで、人一倍強がりなのに、弱い君。

ずっとずっとこんな日々が続くと信じていたのに、君が最後に言った言葉、「ねえ、私のこと、忘れないでね……もし、いなくなっても、ちゃんと毎日指電話してね、心はつながってるから……」珍しく弱気なことを言った君にうなずく。

「わかったよ、晴。晴が俺のそばからいなくならなければいい話だろ？」

何であの時、茶化してしまったんだろう。

だってあれが最後だなんて思いもしなかった。

晴はだいぶ酒によつてたし、家に帰ると駄々をこねる彼女を仕方なく部屋まで送った。

あの言葉が今でも鳴り止まないんだ。

逢いたくて、逢いたくて、声にならない声で君の名前を呼び続けたら後ろに君がいるような気がして、走りだした。

目の前にいる彼女を振り返らせたらまったくの別人で困った。

そうだよな。いるはずないよな。こんな赤の他人と間違えるくらい俺はおかしくなっちゃったのかな？

悲しくて、苦しくて、一人の夜が淋しすぎるから夜空見上げて君を探してる。

「晴、今どこにいるの？俺はココだ。」

晴はどの星なんだ？

ちゃんと指電話、毎日かけるよ。

「晴、愛してる。」

晴、君がくれた指輪を今もしてるよ。

これが二人の最後の絆となってしまったから。

本当は俺も晴の誕生日に晴に指輪を渡すはずだった。

その指輪はちゃんとした結婚指輪なんかじゃなくて、まだオモチャのような指輪だけど、いつか結婚前提でそれまでこれを付けていてほしいと思っていた。

そんなこと言ったら、「あんた、何様？」なんて言われそうだけど、でも俺は本気だったんだよ。

こんなちつばけな指輪でもきつと晴が買ってくれた指輪よりずっと前に俺が心に決め、買っていたもの。

俺の誕生日なんかより晴の誕生日が先にくれば良かったのに。

いつか君に伝えたいと思っていた気持ちはずっと俺の心の中に眠っているままで、どこかで俺を見守る君に俺は毎日指電話をかけるよ。ふつとめざめたら公園のベンチに座っていた。

暖かくて君がいるような気がしたのに、いたのは……「あれ？唯香さん？」いつか俺が晴と間違え、仲良くなった人。

「葎さん、濡れてしまいますよ、帰りましょう？」

「いや、いいよ。もう少しここにいたいんだ。」

「わかりました。私はどうすればいいでしょう？」

愛してる、晴。

この指輪は君にとどくだろうか？

「すこしだけ、外してくれる？」

「……わかりました。では数分だけ。」

「ありがとう。」

「晴、どこにいる？俺はココだ。晴を愛してる。」

愛してる。逢いたいよ。

抱き締めたい。

愛しいよ。

まさか、君が事故で死ぬなんて思いもしなかったんだ。

「愛してる、晴、聞こえてるよね？愛してるよ、ずっと。」

一緒にいることが当たり前だと思っていた。

「愛してる………愛してる！」

一方通行、それでもいい。

愛してる。

大好きな君のことを忘れないよ、移り変わる季節のなかでも最後まで言えなかった言葉。

「まためぐりあって、今度こそ、結婚しような。」

君のことをずっと愛してるから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6627j/>

君に届くまで

2011年10月5日13時54分発行